

鉦石ブチヤに 天狗は参る



目次

幽波放送……………	2
鉦石ラヂヲに天狗は奔る……………	10
錆びたる天地の電波塔……………	18
幻想ラヂヲ倶楽部……………	26

〔幽波放送〕

それは前触れもなく始まったことだった。

降り続く雪が麓までも覆い尽くした二月の初め。さりさりと、木屑を削るようなノイズが突如部屋の隅から響いたかと思うと、

『——JUN'S GOCKU Walk. 悪乃キヤも聞いしんか?』

軽妙な音楽と共に飛び出した見知らぬ声。

しかも草木も眠る丑三つ時という時刻である。すわ泥棒か幽霊か、枕元に先祖でも総立ちで宴会でもしているのかと言わんばかり。

これでどうして落ち着いている事ができようか。

……いや、使用人達を叩き起こしたのは決して驚いたからではなく、あくまでこの学術的に興味深い事実を一刻も早く検証したかったからに他ならないのである。断じてそれ以外の理由などない。ないっただけだ。

『今日も放送を始めよう。馬鹿馬鹿しい毎日におさびはするため』

落ち着いて部屋を見回してみれば、声の元は部屋の片隅で埃を被っていたラジオの筐体だった。

このラジオ、もとはと言えば魔法の森の古道具屋で買ったものである。

数年前に人里での大々的に放送が企画された折に、興味を覚えた私が用意したものだのだが、鳴り物入りで発表された第1回の試験放送が失敗に終わって以来、すっかり企画自体が立ち消えとなり、そのまま放置されていたものである。

邪魔になるし使道もないので処分も何度か考えはしたのだが、なんとなく捨てる気にもなれず、購入時の価格がそこそこ高価だったことも手伝って、机の隅に放りっぱなしになっていたものであった。

『さて、次の曲は——』

一体どの誰が話しているのだろうか、聞いたこともない曲に乗せて次々と語られる言葉は、万事がそんな調子。

わずかに受信状況が悪いのか、砂を擦るようなノイズの奥に聞こえる声は、恐らくは女性のものであることが分かった。耳慣れない単語や聞いたこともない表現も混じり、一体それが誰のものであるのかは判然としない。

しかし、講談でもするような語りの妙でしゃべり続けるその内容は、取るに足らないことをあれこれと楽しげに繰り返していた。

ラジオの向こうの語り手に、いつしか時を忘れて聞き入ってしまいい——気付けば空が白み始めていたのだった。



さて、まだ買って五年と経たない品に喪が付くのも奇妙なこと。見たところまだ十年と使われていない品であり、道具屋の店主がそのあたりを誤魔化したとも考えにくい。

粗末に扱った覚えもないが触れもせず動くとすれば、いよいよ阿礼乙女たる私にも、九代目を重ねて求聞時を超え靈感でも目覚めたかと一頻り考えてはみたものの、どうもそうした気配ではなく。

さらにノイズの中に聴こえて来た陽気な楽曲のリズムは、怪談のそれとはかけ離れたものであった。

寝不足の頭では上手く思考もまとまらず、どうにも得心がいかにぬま、欠伸混じりで出された朝餉を無理やり口に押し込んだ、私は眠気覚ましに朝の里を散歩することにした。

陽は出ていてもまだシンと冷え込む辻を抜け、ブーツの底で薄く積もった新しい雪を踏んであれこれと首を捻りつつ歩いてると、道のあちこちから、興奮気味に聞こえる噂話。

——なんと、すでに里中でこのラジオの怪異は噂になつていたのである。

私と同じように、以前の試験放送開始に先駆けてラジオを手に入れていた好事家はそれなりに居たらしい。埃を被っていた筐体たちが、物置の奥で、質蔵の中で、棚の隅で、昨夜一斉に音楽を奏で語り出したらしい。

もともと野良仕事もなく、精々が雪かき程度でしか外に出ることもなくなる冬の最中だ。夜中、独りでに語り出すラジオの噂はすぐに広まったようだった。

行きつけのカフェ、幻燈館でもその噂で持ち切りだった。店の主人もラジオを手に入れていた一人であり、昨晩なれなれしく喋り出した受信機に腰を抜かささんばかりだったと言う。店はちよつとした混雑になっており、埃を落とされたばかりのラジオの筐体を囲んで、懐かしく試験放送当時の思い出話に花を咲かせる人々の姿もあった。

そして——その日の夜。まさかまさかと思ひながらも、筐体を取り囲み、固唾を飲んで見守る皆の前で、ラジオは当たり前のように再び喋り出したのである。

次の日の夜も、その次の日の夜も。同じように真夜中の時刻の丑三つ時。ラジオは独りでに話し出すようになった。

当初こそおどろおどろしい装飾を加えられて流れた噂は、すぐに娯楽性の高いものへと変わっていった。

得体の知れぬ誰かのものとは言え、一旦それが無害だと分かっつてしまえば、娯楽に飢えた里の人々にとっては格好の話題な

のだった。

中には一見——いや、一聞の価値はあると詰めかけるものまで出る始末。時ならぬ冬の百物語というわけだ。

とは言え良いことばかりではない。なにしろ時刻が真夜中、草木も眠る午前二時過ぎである。農閑期とは言え里中には寝不足と朝寝坊が続出し、目覚ましにと珈琲が良く売れたため、私の好きな銘柄が切れるという事態にもなった。

そしてまた、ラヂオなど早々各家に備えられている訳でもなく、毎日深夜に雪の降りしきる中、質屋や道具屋などは軒先に集まつてくる彼らを客としても扱いかね、さりとて野次馬と追ひ払うこともできず、時ならぬ騒ぎに店主は要らぬ苦勞を強いられたという。

幻燈館を始め、ラヂオを持っていたカフェでは夜に店を開けることにし、昼間は休むという臨時営業を開始した。

時ならぬ繁盛を見せたのは他でもない、魔法の森の境界に店を構える古道具屋、香霖堂。店主の森近氏は普段閑古鳥ばかりの店に詰めかける客人たちに、ラヂオの入荷がしばらくないことを何遍も説明する羽目になったらしい。元々、店主が気まぐれで集めた品を並べているだけの、品揃えなどあつて無きがごとしの古道具屋だ、さぞ苦勞したに違いない。

私の部屋も例外なく使用人たちの溜まり場となつてしまったが、これまた頭痛の種であつた。この異変を記録するためには

放送を聞いていなければならぬのだが、その間にも使用人たちがひっきりなしに様子を伺いに来る。じつに気が散つて仕方がない。

放送の数時間前からそわそわと廊下前や隣の部屋に集まり始める使用人たちに、仮眠を取つておくにも不自由し、すっかり寝不足が常となつてしまった。

仕方なしに、私はもう一台のラヂオを買い求める羽目になつたのである。



かくして人里の話題をかっさらつた幽霊放送であるが、それがいったい誰の手によるものであるかと言うのは目下、全くの不明であつた。

ラヂオというからにはなにがしかの放送を受信していることになる。が、それはつまり、どこかにこの放送を流している者がいるということなのだ。だがそんな本格的な設備は人里はおろか、幻想郷のどこにあるのかも判然としない。

妖怪の山あたりでは河童や天狗がそうした技術を完成させている可能性はある。以前、地底探検に赴いた巫女と魔法使いが、通信のようなものを可能にした技術を持っていたのは確認するまでもなく事実として記録されている。

だが、今回に限ってはどうもその線も薄いようなのだ。それとなく探りを入れてみたものの、妖怪たちが動いている様子は確認できず、神様たちの関与も窺えない。

買出しに訪れた紅魔館の侍従長に確認してみたが、門番に大荷物を持たせた彼女はそもそも、ラジオの存在を認識していなかった。蒐集癖で知られる森の魔法使いも同様で、端末は持っているらしいが、彼女もラジオは箒に引っかけて飛ぶものであると思っただけだった。

一番怪しいと目していた守矢の神様たちに至っては、聞くなりどこで放送しているのか、何時からなのかを喜色満面で飛び付けてくる始末。山の上は余程娯楽に欠けているのだろうと推測できた。

調べる限り、この放送の及ぶ範囲はどうも人里に限定されているようであった。

しかし、それを可能にできるような相手というのがほとんど思いつかない。心当たりがないとまでは言わないが、そうしたことが可能な相手に限って、こんな手間暇をかけたことをしないだろうという確信もあった。

また、かつての試験放送に使われるはずだったラジオ放送局の機材も、事故の後処理に売り払われたり撤去されたりで散逸し、残っている機器もロクに整備されておらず、まともに機能するものではないらしい。

では一体、夜毎に響くこの声の主は誰なのだろうか？

ラジオが日常へ受け入れられていくにつれ、皆の興味はそこへと移っていったのだった。



「……はい、毎度ありがとうございます……つて、え？ 違いの？ 葉じゃなくて？」

私が、里の往来で葉売りをしていた永遠亭の兎を捕まえたのはそんな折であった。

月の夜半 玉兎である彼女は、万物の波長を操り、見聞きできる能力を持つという。幻想郷縁起の取材でそれは把握できていた。

彼女であれば夜毎、放送に用いられている電波を受信し、直接『視る』こともできるのではないかと、そう考えたわけだ。

誰かが解らないなら、どこからかを突き止める方が早いだろうという訳である。

「成程。いいわ、いつてらっしゃい、ウドンゲ」

「そうそう。たまには役に立ってけるといいよ、鈴仙。いい加減うちらも影薄くなつてばかりも困るからね」

「そ、そんなあつさり……」

我ながらなかなか良い発想だと思いつつ、彼女と彼女の師匠とにあれこれと交渉をして、その夜、彼女には私の部屋でラジ

オの放送を聞いてもらう運びとなった。

人見知りらしいという彼女、一緒に過ごしてみるとそれはそれでなかなか興味深い経歴を持っており、第二次月面戦争にまつわる話も 聴けたのだが——それは今回あまり関係がない。

かくして深夜。つい珈琲を飲み過ぎて3回も厠に立つはめになりながら、ついに時刻はその時を迎えた。いつものように、ノイズ混じりのラジオから聞き慣れた語り口が聞こえてくる。

息を飲み、私は期待を込めて彼女にこの電波の波長を見てもらったのだが——

「ねえ、そんなもの、視えないけど？」

首を傾げて曰く、そんな返答。

彼女曰く。このラジオに流れ込んでいる特有の波長などというものは見当たらないらしい。玉兔の沽券にかけて、彼女はそれを断言した。つまり、これは電波を経由した正しい放送ではない、ということになる。

成程、そうと判明したのは、確かに一つの成果ではあるう。

しかし、それですます話はややこしくなってしまったのだ。ではいったい全体、毎夜聞こえてくるこの声は誰のものであり、電波を通じた放送をせずに、どうしてここにその声が届くというのだろうか？

私があるこれと頭を悩ませている間にも、毎夜の放送は続いていた。

毎日何時間と放送を聞いていれば、顔の見えない相手として、次第に親密感もわく。

どうも、彼女はたった一人でこの放送を続けているらしいということは、徐々に分かってきた。語り続けるラジオが直接それを口にした訳ではないが、些細な口調の変化、言い回し、それらが端々に、言葉の向こうの孤独を伝えている。

決して寂寥感を感じさせぬことのない、軽妙な語り口——けれどそれは、何か、寄る辺を、縁よすがを求め、切なる訴えのように聞こえるのだ。

いつしか、私は受信機の嬌態の向こうに、語り手の姿を思い描くようになっていた。

聞くだけの私に何ができるといふ訳でもない。けれど、彼女をこのままにしておいてはいけないという強い思いが、芽生えているのを自覚しなければならなかった。



転機は突然、訪れた。

間もなく2月も過ぎようという季節、すっかり習慣になつてしまった朝寝坊のせいで、今日も朝餉を食べ損ね、空きっ腹をかかえて街中をあてもなく歩いてきた寒い朝のこと。

「ああ、久しいね、御阿礼の」

不意に背中から呼び止められ、振り向いて見れば。茶店の軒先に、見慣れた赤毛の死神が分厚い外套を羽織り陣取っていた。

商売道具らしい大鎌をそこらに放り出して、椅子に堂々と腰かけて蒸し饅頭などにかぶり付いている。お茶のお代わりまで申し出る様は、小休憩と呼べそうもない、なかなか根っこの生えた様子である。街中でひよっこ彼女と出くわすというのは、それなりに肝の冷えるものであるのだが、当の彼女はそんな事お構いなしである。

「どしたい、こんな寒い中で。……ん？ あたいかい？ あはは。最近じゃ近場で休憩してるとすぐに連れ戻されてねえ。流石にこの辺まで出てくりや、映姫さまもそうそう追っかけて来ないだろうって寸法さ」

どうあってもサボっていれば最終的には上司に露呈し、お説教になるだろうことはそもそも考えの埒外であるらしい。

彼女が死神となる以前の出自は定かではないが、小野塚サボタケレムの孝子の名に恥じない納得の怠慢ぶりである。

「ま、奢るからちよっと寄ってつたらいいよ、おばちゃん、饅頭追加で」

実に手際よく私をサボりの共犯に巻き込む。職務放棄の後ろめたさすら感じさせない堂に入った暢気さについてそ気風の良さまで覚えつつも、私は蒸し饅頭を頂きながら、目下気になっっているラジオの件について聞いてみることにした。

するとこの死神小町、きゅうにそわそわしたかと思うと、まだ半分は残っていた饅頭を無理やり口の中に押し込み始める。饅頭を喉に詰まらせ、噎せた彼女にお茶を飲ませ、落ち着かせてみれば。

「まいったねえ……」

実にバツの悪そうな顔。どうやら当たりを引いたらしい。



死神が解っていることと言えば、人の寿命と迷える魂の在り処くらいである。

上司には秘密にしておくれよ、と念を押す彼女を説き伏せ、一体どういことかと問う私に、彼女は頬を掻きつつ教えてくれた。

「いやあ……簡単なことなのさ。勝手に鳴りだす楽器なんて言えば、騒霊と相場が決まってるじゃないか」

——つまりは。こういうことらしい。

無縁塚におちてきた品物の多くは基本的に外から迷い込んできた人間の所有物である。彼等の中にはそのまま命を落とす者も居り、そこに残る者たちの魂を運ぶのも死神の役目である。そうなる。

そして彼女、どうやら森近氏に頼まれて、無縁塚で見つけた

品物に目星をつけ、古道具屋まで運ぶということをしていたらしい。

考えてみれば、かの古道具屋が取り扱っているものの大半は、森近氏があちこちを歩いて拾い集めてきたものである。氏素性のはつきりしないものが多々混じっている———というかそれらが大半であるのは、少し考えれば自明のことであり

「いやまあ、前に見つけたのが、その無縁塚のあたりに落ちてた仏サンなんだけどね、誘魂灯を持つてくるのを忘れててねえ、船着き場に来る前に逃げ出しちまったんだよ」

おそらくサボっていて気付かなかつたというのが本当のところなのだろうけれど、余計な口は出さずにおく。

どうもこの彼女、喋り足りなくて、亡霊———いや、騒霊になつて、ラジオにとり憑いたと、まあ、そんなことらしい。

事情を聞いて、私は騒ぎの原因となつた死神を連れ、自室へと急ぐことにした。私が死神を連れ帰つたことでヤエさんを始めとした使用人たちは腰を抜き、ちよつとした騒ぎになつたりもしたが———それはまあ別の話。

ラジオに向かつた死神が、懐から小さな硝子の鈴を出して凜と鳴らす。すると、ラジオは一度震えて、観念したように喋り始めたのである。

彼女の語つた正体は、概ね死神小町の説明通りであつた。かくして一件落着、夜毎の幽霊ラジオ放送は終焉を迎え、迷える

幽霊は死神に連れられ、地獄の裁きを受け、冥界へと赴くこととなる———はず、だつたのだが。

『今日もくだらない放送を始めよう、この世におさらばするために———』

どういう具合か、私の持つていたラジオだけは、冥界の彼女と波長が合つてしまつたらしい。

毎夜、深夜になると語り出すラジオは、今日も私の机の上から、冥界からのホットな話題を提供してくれていた

「鉦石ラヂヲに天狗は奔る」

今年の春の事になる。

長らく続いた幻想郷縁起改版『『東方求聞口授』好評発売中』の校正作業にもようやく目途が付き、あとは印刷を残すのみとなった三月某日。久方ぶりののんびりとした朝を迎えた私が穏やかな陽射しに暖をとりながら寝そべって午後読書の楽しみでいた私の元に、一陣の風が吹いた。

突如現れた来訪者は、庭にびようと旋風が渦巻かせ、突風とともに障子を蹴散らして部屋の中へと飛び込んできた。

観音開きのように吹き飛んだ障子から慌てて湯呑みと茶菓子避難させる私の前で、折角揃えていた幻想郷縁起改版の原稿が紙吹雪のように舞い、部屋中へと散乱してゆく。

旋風に黒い羽根を散らし現れたのは、一人の鴉天狗。

「阿求さんっ!!」

細い肩を怒らせ、彼女は背中の黒翼もそのままに私の肩を掴むように詰め寄ってくる。鼻筋の通った整った顔が近づき、深山の緑を思わせる穏やかな香りがふと鼻を掠めた。

里に最も近い天狗、射命丸文。

私とは旧知の間柄にして、同じ文筆をむねとするものとして少なからぬ共感のある友人の一人である。幻想郷最速を標榜する彼女が、天狗の中でも特に人里に近しく、取材と称して当宅を訪れては、お茶などを催促することは珍しくはないが、今日の来訪は些か忙しなくも騒々しすぎた。

「これは一体どういうことですか!？」

「どう、と申されましても」

口角泡を飛ばさんばかりのその劍幕に、顔に張り付いた原稿の一枚を剥がしつつ応じる。

長じた妖怪の常として、いつも余裕を保ち、時に皮肉めいた言い回しを好む彼女には珍しく、冷静を欠いているようだった。

背中の黒翼も仕舞い忘れたままだ。

「一緒にお茶でも、という雰囲気ではありませんね」

「惚けないでください、このことですよ!!」

ぐっと突き出された手の平には、飴玉を包むような小さな油紙。その中には黄金色に輝く、小さな立方体が覗いていた。

一辺が一糎程の金属塊を一握り、一〇個ばかり握り締めて、文さんはきりと整った眉を吊り上げる。

「阿求さん、まさかあなたが知らないとは言わせませんよ!

どういうことか説明していただけますか!」

「はあ」

……ひとまず、概ねの事情は理解できた。

とは言え、滅多に見られない鴉天狗の取り乱し方に、とりあえず私は空とぼけて彼女の差し出す金属片を覗き込み、はてと首をかして見せる

「……ふむ、文さんも鴉天狗だけに光りモノには目がないんでしょうか？ 千年以上も生きていても、やはり妖怪変化の性は業が深いということでしょうか。これは知りませんでしたね」

「そんなことで誤魔化そうだったってそうはいきませんからね!? 何の裏付けもなしに私がここまで来るとでも思ってるんですか!？」

文さんはさらに懐から取り出した数枚のチラシを、机の上にとばんと叩きつける。

——『幻想郷チラシ放送局』近日開局!

色鮮やかなインクの匂いとともに、紙面にはそんな文字が踊っていた。

「なんなんですかこれは一体!」

文々。新聞特務記者、射命丸文の悲鳴が、邸内に響き渡った。



「一体どこの誰がこんな極悪非道なことを企んでいるんです

!!」

「極悪非道で!」

「極悪非道に決まってるでしょう!!」

正直に答えたらそのまま取って食らわんばかりの剣幕で、彼女は叫び——ばんばんと机を叩く。

まあ、いつかこうなるだろうと危惧していた事ではあり、概ね予想通りの展開といえた。

「悠長な事を言っている場合ですか!? これは幻想郷の文化を脅かす一大事ですよ?! まさか阿求さんがそれを黙って見過ごそうなんて、人里の責任役としてその態度を問われます!」

「——ちよつと落ち着いてください文さん」

顔に唾が飛びそうな程の剣幕でまくしたてる文さん。いつの間にか襖に背中が触れるくらいまで詰め寄られていた。息のかかるほどに近くなる彼女の顔を押しつけ、その場に座らせる。

土埃で割と台無しになった茶菓子の皿を（珍しい洋風のケーキだったのだが、残念）、心惜しくも卓の上に戻し、女中を呼び付けてお茶の用意を申しつける。

まだ何か言いたそうにしていた文さんも、さすがに年経た妖怪として余裕と礼儀を欠いていたことに気付いたか、ふうと深呼吸をして胸の中の重い空気を吐き出したようだった。

「……失礼、取り乱しました。お恥ずかしいところを」

確かに滅多に見れない慌てようであつたと思う。

今なお、上辺は冷静を取り戻したように装ってはいるが、なお彼女の背中では仕舞いきれない羽根の先端がばたばたと忙しない。妖怪というのも大変だなあともまるきり他人事で思いながら、程なく用意された栗饅頭と熱い抹茶を前に、私は改めて卓に向う。

「少々要領を得ませんが、大体分かりました。お話を総合するに、文さんはこの」

チラシと、その上に並べられた金属塊——ラジオの受信端末に用いる黄鉄鉦の鉦石を指差し、

「ラジオ放送が人里に普及することで、新聞の売り上げに影響が出ることを危惧している」と？」

「そ、そんな事は言っていないせん」

きつぱりと言い切り、形の良い顎を見せるようにぷいと顔をそむける文さんだが、胸の内の焦躁は面白いくらいに見て取れた。基本、いつも人を食った態度の（性的な意味ではなく）文さんにしては珍しい。

山の妖怪が河童の技術による活版印刷を始めとした（別に洒落ではない）高度な技術を有し、鴉天狗がこぞって報道に身をやつし、新聞を作っては購読者の数で成績を競うなか、多くの天狗たちの新聞が妖怪の山社会の妖怪達だけを対象にしているのに対し、文さんの文々。新聞は人里でも配られる数少ない新聞だ。

記事の程度はどうあれ、執拗な勧誘に悪感情を抱いている人間ばかりではなく、月に二、三度の割合で配布される新聞をそれなりに楽しみにしている者もいるのだ。表立って口にするのもとも高い天狗の鼻が尚更高くなるので面と向かつてそんな事をするものはいないのだが。

「ええ、無論ながらそんなものがどう広まろうと私にはまったく関係のないことです。関係のないことですよ」

二度繰り返してから、文さんはわざとらしく咳払いをした。その上でちらちらとわざとらしくこちらに視線を送ってくる。

「しかしですね阿求さん。貴方もご存じとは思いますが、報道というのは非常に繊細かつ慎重な職務なのです。日々、留まることなく変化し続ける情報を扱うことには極めて慎重かつ複雑な判断を要求されるものなのです。時に権力や政争の道具にされることも然り、誤報が原因で事態をより拗れさせる要因となることもあります。一時も休まることなく、幻想郷の在り方すら左右しかねない重要な立場なのです？ それを一朝一夕に、こんなにも軽々しく——ラジオだなんて」

まるで親の仇でも見るように（天狗に親がいるのかは鋭意調査中である）、チラシを睨みつけ、ばんとその上に白い手のひらを叩きつける。

「迂闊にこんなものに出して、もし何かの間違いがあったらどうするつもりですか!!」

「ふむ。つまり、心配してくれているということの良いのでしょうか？」

本音が良く透けて見える言い分だったが、文さんはそうですね。そうですとばかりに勢い込んで頷く。

「まったくその通りです。阿求さんはもう少しご自分の立場を考えて頂きたいのですよ。だいたい、私にも気づかれないようにこっそり河童まで巻き込んで、よくもまあこんな大それたことを……!!」

「……随分とお耳の遅いことで。かなり前から企画は進んでいたのですけどねえ。そう言えば文さん、最近はずっかり地底の妖怪やら妖精戦争やらにご執心だったようすけれど」

「ぐっ……!?!」

痛いところを突かれたか、口を噤む幻想郷最速のブン屋。

文さんとしても、ラジオ放送の内容について見落としていたことには引け目を感じているらしかった。彼女がおもに騒動の種として追いかけているのは妖怪と一部の特殊な人間たちで、人里での事件はあまり見向きもしない傾向がある。

憤っている理由のいくらかは、ただの人間、と思っていた相手にしてやられたことへの苛立ちもあるのだろう。

「それに企むも何も、里の有志が企画したことですよ。最近、いい具合にたくさん部品が仕入れられたそうなので。香霖堂さんにも協力していただきましたが」

「既にそこまで手が回ってるなんて……!!」

ぎり、と齒軋りする文さん。

なお、ラジオ局の開設にあたり、特段の緘口令が敷かれていた等ということは勿論ない。現にこうして広告を打っていることから分かる通り、人里では既に話題の最中である。

「見損ないましたよ阿求さん！ 仮にも幻想郷のオビニオンリダーともあろう貴方が、こんな俗悪な放送に協力しているなんて！」

「オビニオンなんたらは置いておくとして……。一面に下着姿をスツパ抜くどこかの新聞よりは十分健康的だと思えますけどねえ」

「あれは不可抗力ですと前にも説明したでしょう!! あくまで弾幕の美しさと躍動する少女たちの、かけがえのない一瞬を芸術的観点から切り取っただけのことで、そこにたまたま乙女の清纯なる部位を覆う布切れが写り込んでいたことは、記者の意図するところではなく、そう言った側面から判断されるのは誠に遺憾であると――」

「一々そういう言い訳してるから胡散臭く思われるんですよ」
「うぐっ」

天狗の常として涼しい顔をして風評をばら撒く割に、結構打たれ弱いところがあるのが文さんの可愛い所だろう（感想は個人なものである）。

「それと、誤解があるようなのであらかじめ言っておきますが、私を首謀者のように言われるのは心外です。確かに有志の方々のご協力は頂いていますが、このラジオは人里の皆で企画したものですからね」

「へ？」

それが今回のラジオ放送の目玉でもあるのだった。

ラジオ局の開設にあたって、支援者には稗田の家も名を連ねている。もともと、そこには霧雨商會を始めとして他の里の有力者も軒並み顔を揃えているのだから、特に私だけを強く責められる理由にはならないはずだ。

「あの不慮の事故以来、長らく活動を続けてきた方たちの努力の帰結なのです」

数年前、河童の協力を得て始まるうとしていた幻想郷初のラジオ放送は、試験放送を目前にして不慮の火災によってアンテナが破損。貴重な機材を小火でダメにしてしまうという失態を犯し、完全に頓挫していた。

それを一から作り直したのが、今回企画されている幻想ラジオ放送局なのである。

「しかし、文さんがそこまでムキになるのを見ると、あのラジオ放送局の小火が天狗の仕業だったというのもあながち与太話ではないのかもしれないね」

「な!? 失敬な!! 濡れ衣ですよ!!」

ばん、と机を叩いて抗議する文さん。

実際、根も葉もない風説の類ではあるものの、いまだにラジオ放送が話題になるとそのたびに語られる話でもある。実際にこうしてわざわざ私の元を訪れ、ラジオ放送開局に強い抗議と嫌悪感を示す文さんを見ていると、それも決してただの噂の域には留まらないのではないかと思ってしまうのが困ったものだ。

なによりラジオ放送失敗の顛末は何を隠そう文さん自身の手によって、文々。新聞に面白可笑しく滑稽極まりない失敗談として書き立てられ、各地で話題をさらったのが尾を引いているのである。

……逆に言えば、あの新聞が無ければ放送委員会の奮起もなかったわけだ。

「そういう意味では、文さんが彼らの心に火を点けたということにもなりますね」

「ぐ……」

「ある意味、今回の一番の立役者とも言えます。ということで、開局の折には是非ゲストに来て頂いて、当時の思い出などをお話していただければと。あ、これ招待状です」

「そういう問題ですか!？」

差し出した招待状をべいっと跳ねのけ、文さんは力強くテーブルを叩く。

「——読めましたよ、そういう魂胆ですな阿求さん。私をそうやってラジオ局に取り込んでしまおうという算段ですね!!? 断固としてお断りします! ええ、お断りですとも! 文々。新聞の記者として、私はこの職に誇りを持っているのですから!!」

「……下着を撮るのにですか?」

胡乱な顔をしながら、袴の後ろを抑えて後ずさってみたり。

「ですから不可抗力だと言ってるじゃないですか!!?」

後半はほとんど悲鳴だった。いやはや、ここまで取り乱す彼女の素顔なんてなかなか見れないものだから、つい遊び過ぎたかも知れない。こほんとか咳を挟み、私はお茶を口へと運ぶ。ほうと息を吐き、改めて文さんを見た。

「お話は分かりました。ですが文さん、随分とお急ぎでしたようですが、いったい私に何を訴えるつもりだったんです? まさか、放送を取りやめるとでも?」

「……その、それは」

途端に口籠る文さん。

「このままでは何が起るかわからないから、ラジオ放送局などを興すのはやめると、文々。新聞の射命丸文さんから抗議があったとしても、みなさんにお伝えすればよいのでしょうかね?」

「いや、その、そういう訳では、ないんですが」

「まさか天狗の方々が、人里のラジオ放送程度に負けるなどと

いうことを危惧されているわけではありませんよね?」

少し意地悪く微笑んで見せる。みるみる文さんの表情から余裕がなくなつてゆくのに、多少なりとも心苦しいものを感じたが——まあ、ある意味で自業自得であるう。

つまるところ、無線通信による情報の速度というものには、文さん色々と思うところがあるのだろう。幻想郷最速を標榜し、実際に無双の速度を誇る彼女としても、同時に二か所に居ることとはできない。

取材を終えてから山へとつて返し、記事を書きあげて出版に回し、刷り上がった号外を再び配るまでの時間がある以上、ラジオには情報の速さという点で一歩及ばない。

「それともまさか、先程の言葉は警告ということでしょうか? このまま開局を諦めない限り、再び災いが起こるとでも——」

「そ、そんなわけないでしょう!!? 堂々、受けて立とうじゃありませんか!!」

それは恐らく苦しまぎれの末に出してしまった言葉なのだろうが——残念なことに、それが王手となった。

「……だ、そうですよ、皆さん」

がらりと襖が開く。奥にはずらりと並んだしてやっつたりの顔。幻想郷放送局スタッフの一同である。

花屋を営む友人の隣や寺子屋の慧音先生、警備の小鬼姫さん等々。見た顔もあれこれと含まれている。人里で何かを始めよ

うとすれば、どうしても顔見知りが集まってしまうのは仕方のないことで、いまいちインパクトには欠けるが、こればかりは仕方がない。

襖の向こうにあつたマイクを示し、私はにこりととどめの一言を押し込む。

「いまの一言、生放送で伝えさせていただきました」

「ひ、」

「卑怯者とは仰いけませんよね。まさか、天狗様が人間相手に」

ここで引き下がる様では、天狗とは言えない。予想通り、文さんはじつと見る一同の前にどうどう立ちほだかり、威勢よく胸を張ってみせた。

「……………い、いいでしょう!! この射命丸文を見くびつて頂いては困りますね!! 勝負ですよ阿求さん、ただか人里のラジオごときに負けるような文々。新聞ではありません!! 幻想郷最速のニュースの価値を、この機会に十分に思い知らせてあげましょう」

——かくして。

人里と天狗、双方の威信を懸けた報道合戦の火蓋が切つて落とされることとなったのである。



そして一月余り。

結論として、我々は天狗のしたたかさを嫌と言うほど思い知らされる羽目になった。

「どうもー、文々。新聞でーす」

にこやかに投函される新聞を、人里の皆は競うようにして手に取る。今季の文々、新聞の購読者数は、過去の記録を大きく塗り替えて増倍していた。

「どうも、ご精が出ますね文さん」

「いえいえ。これも皆さんのお陰ですよ」

天狗に相応しい余裕たつぶりの表情で、文さんはばさりと手の葉団扇を振るう。風に乗って舞い飛ぶ新聞が、私の手元へも流れてくる。

いつも通りの大仰で人目を引く見出し——これまでとなんら変わることはない紙面づくり。けれど、今人里の人々を駆り立てるのはその記事の内容ではない。私はうんざりと新聞の裏面を捲る。そこには二色刷りで刷られた今週のラジオ放送の番組予定表が並んでいた。

確かに情報の速さで、新聞はラジオに勝てるものではない。

それに対して文さんが取った対抗策が、ラジオの放送予定を新聞に乗せてしまおうというものであった。

いったいどの情報筋から得たものか、文さんは内部でも三つのはずの今週の放送予定を見つけ出し、毎週それを新聞に乗

せているのである。

確かにラヂオは四六時中鳴ってはいるが、人気の番組とそうでないものがあるのは仕方ないことだ。(慧音先生の放送寺子屋授業とか)。

お目当ての番組を聞きたいという者も多かろう。勿論、放送局でも無料の番組表を用意して刷る予定だったのだが——文さんはそれよりも二日も早く番組表を作りだして、新聞に載せているのだった。

「いやあ、すっかり人気の方ですなあ、ラヂオというのなかなか侮れません」

どこからか仕入れてきたらしい携帯ラヂオを首から下げ、ここにこと文さん。今日の部数はすっかり完売のようで、いい汗かいたとばかりに額をぬぐってみせる。

「ええ、まったくしてやられましたなあ」

ここまで堂々と開き直られると、もう苦笑いしか出てこない。幻想郷ラヂオの開局に、妖怪に害らない人間主体の情報経路を用意する、という側面があったことは確かなのだが——。それを見事に文さんに持って行かれた形だった。

「いえいえ。報道は持ちつ持たれつ、お互いに不足し合う部分を補って行われるべきものですよ。これからも良い関係を築いていければ何よりです」

「……どの口が言いますか」

心底あきれ顔の私に、文さんは上機嫌で、買ったばかりの冷えた麦茶を飲んでいた。

「錆びたる天地の電波塔」

昨日の雨が嘘のように、空は一面の青。夏の兆しを感じさせるかのように、原色の青空には折り重なった入道雲が覗く。

「ふうむ」

振り仰ぐだけで首が痛くなりそうな高さの塔を、私は溜息とともに見上げていた。四〇米^{メートル}は築にある檣の上で、ようと手を上げる棟梁の甚五郎さんに手を振り返し、視線を地上へと引き戻す。

里の大通りの西の端。耕地にほど近い広場には、木組みの塔が立ち上がり、その周囲では忙しなく放送局の皆が作業にいそしんでいる。

彼等の胸には皆、黄鉄鉱の結晶がぶら下がっていた。本来なら受信機の端末に使う部品なのだが（なお、精製に当たっては博麗神社の巫女に降ろされた金山彦様のお力がある）、受信機の生産が間に合わないため今ではちよっと綺麗な石程度のものでしかない。

現状、人里のラジオ放送はカフェや集会場、食堂といった人の集まりやすい環境に受信機を設置し、放送を行っている。紙

芝居のようなものだ。

ラジオ放送に賛同し、有形無形の協力を申し出てくれた者には優先してこの黄鉄鉱が配られることになっており、今ではラジオ放送に関わる者の身分証明のように機能しているのだった。かく言う私も同じものを胸に留めている。

……結局のところ、幻想郷の住人たちはお祭り好きの宴会好きだ。今回のラジオ放送局は、近年珍しく人里が音頭を取って始めた、いわば異変のようなものである。

「稗田、今日も見回りか？」

今日の台本を抱えてやってきたのは慧音先生。ラジオの運用をいち早く賛同した人里の識者の一人だ。寺子屋に来れない子供たちのために、通信講座の番組を始めたのだが——控えめに言っても聴取率が非常によくなく、最近ではそのことを嘆いているらしい。

……個人的には、慧音先生の授業はあの頭突きとセットで功を成すものであるように思う。いや、わざわざ一撃喰らいたいものではないけれども。

「昨日の雨でアンテナが不調だと聞きました」

「ああ。送電線がやられたらしい。風も強かったが、やはり雷がまずいようだな」

隣でアンテナを見上げる慧音先生。甚五郎さんの号令一過、男衆が地上からケーブルを引つ張り上げてゆく。なるほど、地

上四〇米の櫓は、雷神様が目印にするには格好的と言えるだろう。放送局開局の以前から懸念されていた事であり、アンテナの設置に当たっては十分に対策を用意したものの、天候ばかりはどうしようもない。

なお、今日の龍神様の石像の眼の色は白。天気予報は晴れを示しており、当雨面の心配はない模様。

「幸い、今回は里に被害は無かったが——あまり頻繁にこういうことが起こるようだと、少し考えなければならなくなるぞ」
「防災の事も考えてここに建てましたが、やはり見通しが甘かったですかねえ」

実際、このアンテナは少々目立ちすぎるのだ。物見櫓と勘違いして戦でも起きるのかと寄って来た妖怪もいたのだが、そのあたりは小兎姫さんたち警備隊がきつちりと追い払ったそうなので、ここ以外でこんなに大きなアンテナを用意するのは骨じゃないかい？」

有志その二、河童の河城にとり嬢。ラジオ放送の一件を早々と聞き付けた彼女は、わざわざ変装までして里に入り浸り、整備に協力を申し出ていた。あまり直接的な交流を好まないと聞いている河童だが、彼女は人間の技術は決して侮るなかれ、積極的に交流し学ぶべきであるというのが信条であるらしい。

実に勤勉に放送局の機材の補修や整備をこなす彼女に、最初は距離を置いていた人々も、徐々に親交を開き機器の扱いを学

ぶようになっていた。

「放送局が使ってる周波数を1500Hzとしたって、電波の波長は200m。アンテナはその半分から四分の一の長さが必要になるから、これでも最低限の高さなんだよ？ 余所に移したからって雷が落ちなくなるわけじゃないし、その分メンテナンスが大変になっちゃう」

ラジオの原理というものについて、私も一通り彼女から説明されていたが、正直言つて何が何やら良く分からない。なんでもラジオの方式には2通りのものがあり、今の幻想郷放送局にはそのうちの片方、中波AM方式が使われているという。短波FM方式は機材が小さくて済む代わりに、受信にも送信にもより高度な技術が必要となるのだそう。なお、河城嬢の言葉を借りれば、私の好む女樂もFM音源というもので奏でられているらしい。

そんな彼女は胸元の黄鉄鉦を積み上げ、しみじみと吐息する。
「……凄いなんだよねえ、これ。この鉦石の結晶配列が、電波を読み込んで整流して、そのまま音に変えるって、外の人間はすごいこと考えるよねえ」

独り深々と頷き、口元を緩めて黄鉄鉦を愛でる河城嬢。河童に変わり者が多いというのは知っていたけれど、彼女もその例に漏れず奇人ではある様だった。どうにもその凄さが実感できない身としては、曖昧に同意せざるを得ない。

「そういうもんなのか？」

口を挟むのは有志のその三。自称、普通の魔法使いこと霧雨魔理沙さん。

ちよこちよここと私の家に入りにしているのが縁となり、彼女もいつの間にか放送局の一員として名前を連ねていた。番組の間に霧雨魔法店の宣伝を挟むように要求されているのだが、特にスポンサーとして出資をされている訳でもないのです。今のところそれは実現していない。

「ラジオってのは片方が喋ってることしか聞こえないんだろ？ この間借りた通信機の方がよっぽどすごい気がするけどな」

「そりや違うよ魔理沙」

まるつきり見物気分の魔理沙さんに、河城嬢は分かかってないなあと言わんばかりに首を振った。

「あんな複雑なもの、力のある妖怪だつてそうそう沢山は作れないよ？ それなのにこのラジオはこんなに簡単な仕組みで、霊力も使わずに遠隔地との情報やり取りできる。何より凄いのね、魔理沙。この受信機の方に動力を必要としないってことなんだよ。何も特別な仕組みはいらないんだ。安価に、しかも使う側の条件を問わずに使えるなんて……やつぱり外の世界は進んでるんだねえ」

このところ彼女のラジオに対する評はこれに尽きる。守矢の巫女がそれを聞いて何やら微妙な表情をしていたが——ともあれ、普遍的な、誰にでも使える技術というのが、河城嬢の心を

くすぐるキーワードであるらしい。

「しかし、話は戻るが、実際に影響が出ている以上、アンテナについてはこのままと言うわけにはいかないだろう。何かしら対策を打たなければな」

「確かに、……これから夏になれば雷も増えます。予定にも差障りがありますしね」

慧音先生の言葉に、私はしばし腕を組んで、

「ひとつ、気になる場所がないではないんですが」

「ん？ なんだか知らんが面白そうじゃないか。なんだつたら協力するぜ？」

「ふむ」

願ってもない申し出と、私は魔理沙さんの協力を受けることにした。ひとまずの依頼は、ちよつとした用心棒と移動手段。

「そこまで大袈裟な事になるとは思いませんけど。あまり強い妖怪が居るようなところではありませんし」

「どこだ？ 冥界か？ 地底か？ 三途の向こうはちよつと御免こうむりたいがな」

「私もまだあちらに行くつもりはありませんよ。魔理沙さんはご存知ですか？ ちよつと南の方に、鉄塔が出現したというニュースがありました」

「ああ」

あれか、と魔理沙さんはぼんと手を叩いた。

魔理沙さんの箒の後ろを借りてひと飛び。十分もかからずに私達は南の森の只中にいた。

「なる程。これがその電波塔ですか」

伝聞でその存在は知っていたものの、直接目にするとその威容はなかなかのものだ。鋼材を組み合わせた、まるで骨組だけの櫓が天を衝くばかりに聳えているかのよう。あちこちに風に晒された歳月が染みつき、赤茶けた錆が浮いているものの、作りはまだまだ頑丈に見えた。

申し訳ないが、これと比較すると人里に組み上げた櫓は二回りも迫力がない。大きいことは良いことだ。

本来は異質なものであるうその姿は、いまや森の中にすつかり溶け込んでいた。塔のそここに蔦が絡み付き、枝のように張った鋼材の上には猛禽が巣でも作つたらしく、羽音が聞こえてくる。

額に手をかざし、上空の慧音先生がざつとその周囲を見回す。「見たところ、設備だけなら残っているようだな」

「な？」

魔理沙さんは何故だか得意顔。

この鉄塔、元々は外の世界のもので、そちらで不要とされた



故に、結界を超えてここに現れたのだということらしい。外来の品は無縁塚あたりに流れ着くのが定番なのだが、この塔はなにか、ここに惹かれ合うものがあつたのだろうか。

「しかし、この奇天烈な飾りは一体？」

「前にな、妖精たちがここに棲み付いてた時期があつたんだぜ」自然の体現である妖精は周辺環境の影響を強く受ける。彼女たちにとつて肉体はあつてないようなものであり、精神状態マインドが能力に直結するのである。

異変が起きた時に目にする多くの向日葵妖精（花束を抱えているアレだ）などが最たるものだ。彼女達を普通の妖精と同じ感覚でからかおうとすると痛い目を見ることになる。

なお、紅魔館などでは妖精のこの性質を利用し、彼女達に給仕服を着せてメイドとして仕事をさせている。一種のコスプレであり、まず形から入ることで、普段はまったく役に立たない妖精達もいよいよはマシくらいシマシマの働きをするようになるらしい。地底の火車が使う屍妖精ゾンビ妖精も、同じ理屈でゾンビ化しているため、『一回休み』の期間がえらく短いのである。

森を棲家とする妖精たちは、この電波塔自体の影響を受けたのだろう。

「遠く離れたところにも声が聞こえる御利益があるように、ご神体に仕立てていたな」

「——ああ、だいたいどここの誰か想像がつかしました」

神社めいた真似事をする妖精なんて、他に心当たりがない。

そのうち巫女服でも着てくるのではないかとうんざりする。

「でも、それなら話は早いですね」

「稗田？」

疑問の声を上げる慧音先生を背中に、手近な木を見つくり、ぺたぺたと触れて手ごたえを確かめる。十分に育った樹齢の樹であること、病気などの兆候は見られず、虫が巢食していることもなく、立ち枯れを起こしていることもないのを確認し、

「せえの」

少々はしたないのを承知の上で、袴の裾を持ち上げ——体重を乗せて思い切り木の幹を蹴り飛ばした。

野歩き用に特注したブーツの厚底が、ごんと重い音を立てて木を揺らす。

「——もう一度」

具合を確かめ、先程よりもさらに力を込め、ざわざわと梢の揺れる音が騒がしくなる。

同時、

「あ痛ツ!？」

ずるずるとさりと落下してきたそれが、悲鳴を上げる。

茂みの中には目を回して折り重なった妖精が二匹。その一人をひよいと持ち上げ、

「これに話を聞きましょう」

「——お前、妖精相手にはホント容赦ないのな」

「まあ、私情が入っていることは否定しませんがね」

それもこれも、全て彼女達の悪戯が宜しくないのだ。どうせ彼女達は完璧に忘れてしまっているかもしれないが、こちとら忘れたくても忘れらんないんですよコンチクショウ。

「やれやれだ。……ほれ、起きろ」

「……ふえ？」

息を吹き返した彼女に説明をする。案の定、妖精達は良く解らないという顔をするばかりだった。

「ですから、あの電波塔から余計な飾りを取っ払っても良いかという話です」

「えー？ 知らないけど、いいんじゃない？」

お互いに顔を見合わせ、ねえ？ と首を傾げ合う妖精たち。

そもそもあの電波塔自体に興味がない様子だった。

「……やっぱりもう飽きてたか」

半ば予想通りだったのだろう。魔理沙さんも苦笑い。

「ご神体などと言っている割にはあまり手入れがされている風でもなし、恐らくそんなところだろうと思っていたが。」

妖精の興味は何をおいても一過性であり、基本的に物事には執着しない。子供の秘密基地のような感覚に近いということだろう。今なお彼女達がここに頻繁に出入りしているとなると、それなりに面倒な事になったかもしれないが(程度はどうあれ、

妖精程度でも相性の良いのが3人揃っていると厄介には違いない)——それなら好都合だろう。

「少々里から遠いのが難点ですが、それはおいおいなんとかしていきましよう」

「なんとも、随分大がかりな話になって来たな」

慧音先生が苦笑する。里の有志で始まったラヂオ放送だが、いつしかそれは幻想郷全体の流行となりつつある。

許容を超えて大きくなった物事は、その規模に応じて厄介事も招くものだ。慧音先生はそのあたりを心配しているらしい。

「いいんじゃないやありませんか、お祭りのようなものですよ」

「そうだな」

慧音先生に悪戯っぽく微笑んでみせる。踊る阿呆になんとやら、だ。



「——おや」

一週間後。

再び電波塔を訪れた私が眼にしたものは、ツナギに帽子、一端の作業着に身を固めて、螺子回しやスパナを手に走りまわっている妖精たちの姿であった。

彼女たち、人里の有志達に混じって電波塔の整備をしようと

しているらしい。走り回るたびに機材を壊したり狂わせたり、お世辞にも役に立っているとは言いが、その様子は先日の野良妖精の姿とはかなり変わっていた。

「なんです、この騒ぎは？」

「なんだかよく分からんが、螺子だの金槌だのが気に入ったらいいんで、手伝わってもらってるぜ」

「……妖精が、ですか？」

「古い館に居付く屋敷妖精ブラッフェンなんてのもいるからな。機械の妖精なんてのが出て来たっておかしくないだろ」

妖精は最も適応能力の高い生き物でもある。おそらく一過性のものであるのだろうけれど、いよいよ本格的にラヂオ放送が異変になりつつあるのかもしれない。

そのうち博麗の巫女に退治されてしまうのは時間の問題なのだろうか？ そんな事を考えていた折。

「いやはや、賑々しくなってきましたねえ」

「お、出たな。パラッチ天狗」

最初にその姿をとらえたのは魔理沙さんだった。ぱさり、黒い羽根を揺らし、現れた幻想郷最速のブン屋が近くの梢に足を止める。隣には不機嫌そうな顔の白狼天狗を一人、従えていた。文さんは手にした葉団扇を揺らし、その先端で鉄塔をびしりと指し示す。

「ふむ、これは実に興味深い。この鉄塔が敵の牙城という訳で

すね。椛、ちよいと乱入して一暴れしてきなさい」

「……拒否します。と言うか何が悲しくて私がそんなテロリストまがいのことをしなきゃいけないんですか」

「私がやったら私が犯人になっちゃうでしよう？」

意外そうな顔で答える文さん。清々しいくらい下衆だった。

「その点、椛がやるなら私は痛い目を見ませんしね」

「私が捕まった時点で、黒幕のことは洗いざらい喋りますよ」

「……おやおや」

牙を見せて唸る、椛と呼ばれた白狼天狗。今にも噛み付かかばかりの彼女の視線を跳ねのけ、文さんはひらりと身をひるがえす。彼女の直属の部下なのかは分からないが、あの分ではさぞ苦労していることだろう。

二人のやりとりを眺めていた私は呆れて肩を竦める。

「冷やかしなら間に合っていますか」

「事件あるところに私あり、ですよ。何やら怪しげなことを阿求さん達が企んでいると聞いてやってきました。こんな巨大なアンテナまで持ち出して何をしようというんです？」

聞かれ、私達は揃って顔を見合わせた。気まずそうな慧音先生、口元に悪戯っぽく歯を覗かせる魔理沙さん。

「ちよっと、イケナイことですよ」

「はあ」

答える私に、文さんは不思議そうに首を捻った。

「幻想ラヂオ倶楽部」

全天候型環境都市である京都の夏は去年と同様穏やかであった。網膜に投影された仮想現実を通して、午後の気温と抗議の予定を確認、迫る課題の提出期限と、休講が入っていないことに溜息をつく。

「……なんで今日は夏休みじゃないのかしら」

「今が六月だからじゃない？」

「いまだき紙媒体で提出義務付けられるレポートなんて馬鹿馬鹿しいわよ。資源の無駄だしアナクロに過ぎるわ。レトロ趣味かなんだか知らないけど、岡崎教授も思い付きで余計なこと始めてくれるわよね……」

うんざりと、汗ばむ袖を摘まんで吐息。そろそろ夏物の衣替えをしなければならぬかと考えてアイスコーヒーを啜った。年度の初めに学内に新設されたレトロな雰囲気のカフェテラスで向かい合って、我が秘封倶楽部はお昼の定期会合（平たく言えばお昼ごはん）を開いていた。

向かいに座るマエリベリー・ハーン、通称メリーはテーブルの上に伸びている私を見て苦笑し、ふと思いついたように手を

叩いた。

「あ、そう言えば蓮子。紙媒体で思い出したんだけど——これ、見てくれる？」

「……何それ？」

「綺麗でしょ」

メリーは実に楽しそうににこにこ微笑むばかり。私は怪訝な顔をしつつも、彼女の差し出した、きらきらと輝く正六面体を摘みあげた。

「……ふむ」

どの面も精確な正方形を描く、一分のズレもない立方体の金属鉦石。メリーが脈絡なく奇妙なものを持ち出す時、その出所は決まって、得体のしれないものと相場が決まっている。私の視線を疑念と感じたか、メリーはすぐに説明を始めてくれた。

「昨夜ね、いつもの夢を見たのよ」

メリーに、境界を見つける程度の能力が備わっているというのは、私達二人の間では公知の事実。それどころか彼女は、夜の夢という形で境界を飛び越えることがあった。かつては偶にであったその頻度が最近頻繁なものへと変わりつつあるのは、あまり良くない傾向なのではないかと思ったりもするが——私もその恩恵を預かっている以上、あまり野暮な事は言えない。

「それで、どこかの宝物庫にも忍びこんだのかしら、不思議の国のメリーさんは」

「もう、違わよ」

ふうと頬を膨らませて、メリーが拗ねる。彼女が時折覗かせるこんな子供っぽい仕草を見るのが好きで、ついからかつてしまいたくなるのだが――

「貰ったのよ。放送局の開局記念だつて言われてね。ほら、これを見て?」

口をとがらせながら、メリーは鞆の中から4つ折りにしたチラシを取り出した。

ざらざらと指に引つかかる質の悪い紙――再生紙とも違うその手触りに、藁半紙という呼称が出てくるまでにしばらく時間を要した。真新しいインクの香りをさせる紙面には、これまた古めかしい印字のレトロな字体で、良く分らない日付と「幻想郷ラジオついに開局!」の文字が一杯に踊っている。

この科学世紀にもはや絶滅寸前となった紙媒体の広告だった。手紙や重要書類こそ偽造防止の観点で需要はあるが、広告は今やすっかり電子媒体が専門である。資源や手間、コストの面からも紙媒体の広告なんて代物はまず見られない。

出生登録と同時にARへアクセスを可能にするテクノマンサー適応処置が取られるようになり、今では誰もが特段意識することなく、五感に次ぐ感覚として世界中に広がるネットスフィアの恩恵に預かっている。一昔前には眼鏡やコンタクトを介して網膜投影していたARに、人類は呼吸するように適応してい

た。

「なんて言うのかしら、レトロモダン? 素敵な感じのカフェとか、古いお店が並んでる石畳の通りでね、たくさん人がいたわ。中には人間じゃない人たちも居たみたいけど――向こうから賑やかな行列が道を歩いてきてね、音楽を鳴らしながら、このチラシを配ってたのよ」

独りで音を奏でる楽器を演奏する楽団を先頭に、翼や角をもった、明らかに人ではない姿の混じる行列は、街の中を練り歩いていた。

盛んにこの幻想郷ラジオなるものを喧伝する一団は、雑踏の中から目ざとくメリーを見つけると、運がいいねえなどと言いながら押し付けるようにこの鉦石を手渡していったのだという。「気が付いたら目が覚めてて……でも、ちゃんとそのチラシと鉦石は枕元にあつたのよね」

状況から総合するに、メリーがまたあの異境の地、幻想郷に迷い込んでいたのは間違いないまい。わざわざメリーを選んだというのが少しひっかかるが、……それよりも。

「それで、これなんだけど……なんなのかしら。金?」

「貸してくれる?」

私もメリーも少女の端くれである。貴金属には当然ながらそれなりの興味もあった。片目をつぶって鉦石を覗き込んでいるメリーに声をかけ、ARのログインをアカデミックモードに変

更。いつも論文検索に使っているスプライトを叩き起こし、スレッドを編集し複合体を作成。大学のデータベースを歩かせるように指示する。

電子の海からは、すぐにヒットが帰ってきた。

「残念ながら金じゃないわ。硫黄^{Sulfur}五三、四%、鉄^{Iron}四六・六%。比重五・〇一、モース硬度六・四五。FeS₂の結晶。黄鉄鉱^{Pyrite}ね」

「……なんだ」

ある意味メリーの感想は正しい。かつて愚者の黄金などと呼ばれた正六面体の結晶は、磨き抜かれたように美しい結晶格子を持ち、一見高い価値を持つようにも見えた。

「でも、それとは別の意味で貴重かもよ、これは」

「どういことや」

簡易走査で確認しただけでも、手元の正六面体結晶の精度は並みならぬものであることが分かる。その純度は0が小数点以下に9つ並んでも表現できず、なお続く超高精度。果たして京大の実験室レベルでも再現できるかどうか。

「それにね、これ、ARタグが付いてないのよ」

チランと金属塊をメリーに示す。

たとえ資材として使われる無垢な金属塊であっても、それが人の手によるものならば必ず電子タグ処置がなされ、その製造者や純度、製造日時、製造番号を示すタグが分子記号として埋め込まれているはずだ。今の社会はAR処置のされていないも

のには対応しておらず、歴史遺産や文化遺産、路傍の石にすら、様々な目的で位置情報や管理者を示すタグが配置されているはずなのである。

ふと気付いてARに嘔ませている3つのフィルタを解除する。途端、洪水のように極彩色の仮想現実の広告がどつと視界に溢れだした。アクティブなARスパムが何重にも展開して押し寄せ、メリーの顔すら見えなくなってしまう。

「……むむむ」

しかしそれでもなお、手の中の正六面体の結晶には何も表示されていないかった。

「参った、降参。……確かにこれ、普通じゃないわね」

「でしょ？」

勝ち誇ったように胸を張るメリー。本人は意図していないのだろうけれど、夏服でそんな事をするものだからやたらと胸が強調されていた。……ええい、悔しくないぞ。ないつたらない。

「……純鉄だつてまだコストがかかり過ぎて実用化は不可能なのに、こんな正確な結晶配列なんて、どうやったら作れるのかしら」

「神様が作ったって言いたいの？」

「それくらい凄いものだってことよ」

少なくともこの黄鉄鉱の結晶は、ここ三〇年で作られたものではないか、意図的にタグを埋め込んでいないか削除したもの

であるということだ。

一気にレア度が増していた。まあ、流石にこの科学世紀でも野山に転がる意志の一つ一つ、地層に埋もれた石にまでタグを産めるようなことはないだろうが——メリーがわざわざ私を驚かせるためだけに都内を出て山を何時間も歩き、泥にまみれて鉦石を採取する理由にはならないだろう。第一、昨日の今日でメリーにそんな時間は無かったはずだ。

「ラジオ、ねえ」

よし、と一つ頷いて。私は残りのアイスコーヒーを氷ごと口の中に放りこみ、チラシを手に席を立った。

「今日の午後の予定はキャンセルよ、メリー」

「いいの？ 後で課題、増やされても知らないわよ？」

「今できることをしなくちゃ、乙女の名折れつてもものよ」



ぎい、と古めかしい蝶番が軋む。真鍮の錠を借りた鍵で開け、ドアの向こうの階段を上ってゆく。掃除は行き届いていても、長年積もった埃と黴の匂いは、折り重なった年月のように染み付いていた。

大学に併設された記念館は、科学世紀の時代から取り残されたかのような姿でそこにあった。存在すら忘れられたような木

造の3階建て。耐震補強と劣化防止の措置はされているものの、木のおいにおいに満ちた建物の中に、電子化すらされていない古い機械が並ぶ光景は、いつの間にか百年以上の昔に時間を飛び越えたような錯覚すら覚えてしまう。

この記念館、卒業生が寄贈したものだと言うが、遷都でも移転を免れたというから、前の戦争の以前からここに残っていることになる。

「3階って言ってたわよね」

壁の案内板に従って（これも信じられないことにAR未対応だ）廊下に出、骨董めいた品々がぎっしりと詰め込まれた架台の中を進んでゆく。

記念館の管理を務める老齢の女性は、私達の急で不躰な申し出にも関わらず、快く頼みを了承してくれた。

「まるで歴史の地層ね」

シリンドーと発条を組み合わせた計算機、電球の様な真空管を並べた通信機。そこに積みあげられた品々に、メリーが感嘆の声を漏らす。展示品——というよりは、倉庫を眺めている気分だった。

確かに歴史的な価値はあるのだろうけれど、逆に言えばこれらの道具は丸ごと、今の時代に興味を示されることもなく、時代の地層として堆積しているようなものなのだ。地面の下に何があるのかなんて、普通に生活している限りまず気にかけない

ことだろう。

通路を進むに従って、時代が遡ってゆく。二十世紀も初頭に差し掛かる年代になる頃になって、ようやくお目当ての区画が近づいてきた。ぎしぎしと軋む床を進み、架台の前に向かう。

赤い銅線を巻いた糸車と、鏡を組み合わせたような、不可解な姿をしたそれこそが、私達の探していたもの——鉦石ラジオだった。

「一五〇年前の最新情報ツールね」

「これ、本当に動くの？」

「大丈夫なはずよ。原理は単純だし。——ええと、まずは……」
何事にも好事家というものはいるらしく、二世紀近く昔のこのラジオを、今も愛用しているひとはいるらしい。ARで見つけた操作方法を読み出し、見よう見まねで受信装置の部分に鉦石を嵌めこむ。

慎重にダイヤルを操作し、チラシに記されていた周波数に針を合わせる。音声素子に3つの変換器を掛けて携帯端末に接続流れてくるものがただの音とも限らないので、出力をARに直結させることはやめ、念のため近くの棚から拝借したスピーカーを経由させることにした。

「いくわね」

「ええ」

わずかな緊張に、私はそっと唾を飲み込む。

——ひよつとしたら。ずっと昔にこのラジオを聴いていた人も、こんな気持ちで放送を受信していたのかもしれない。

情報が光よりも早く世界を駆け巡り、調べるより先に世界中の知識が頭に流れ込んでくるこの時代——科学世紀の第一歩となったのは、きっとこの、ラジオが契機だ。

そんな事を考えながら、私は端子を黄鉄鉦の結晶表面に触れさせた。

わずかなノイズの後、少女のものと思われる声が、黄金色の鉦石を通じて鮮やかに溢れだす。

「JUNK GOCKAMT 923KHz、幻想郷ラジオ放送局！
ここからの提供は文々。新聞でお送りしますー」

(了)

鉦石ヲチヲ到天狗は奔る

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。
折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『幻想ラヂオに天狗は奔る』は、幻想郷でかつて企画されていたと思しきラヂオ放送にまつわるいくつかのお話を書いた、当サークル二十冊目のSS本となります。

文花帖に収録された文々。新聞第一一九季皐月の三の見出しにある「幻想郷初のラヂオ試験放送失敗」の一文に触発された内容です。

あのラヂオがどんなもので、一体どういった顛末を迎えていたのか。ふと目にした時に止まらなくなった妄想が今回のお話のはじまりですが、また違う形で書いてみたいなど思うテーマでもあります。

鉱石ラヂオの原理なんかについては小さい頃に模型キットを触った以外はほとんど素人同然でありまして、いくつか参考書なんかを斜め読みしてまとめた程度の浅学ゆえ、専門的な知識をお持ちの方からは突っ込みどころ満載かもしれません。あえて嘘をついた部分もありますが、受信機に電力すら使わず、電力の電力自体を拾って放送を聴くことができるという、レトロでありますが非常に合理的な鉱石ラヂオの構造はとても幻想的なものを感じます。

さて。今回の表紙を飾る文の立ち絵素材は四季悠々様から、写真にする表情豊かなアイコンは「こんなんぞ、いいんすか」のきんぎん様からお借りしました。ありがとうございます。

また、いつものごとく白身氏、Riza氏には様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

【奥付】

「幻想ラヂオに天狗は奔る」

平成24年8月11日

C82

発行 オルハザカサンパンチ
折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 あかがね
銅 おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。



——それでは。
また次の機会にお会いできることを願って。



表紙イラスト：金銀様

四季悠々様

東方project Fanbook 2012.8.11 折葉坂三番地